vinetur

チャペル・ダウン、ケント州のワイナリーでスパークリングワインの生産能力を14.3%拡大へ、450万ポンドを投資

同じ収穫量から瓶内二次発酵方式のスパークリングワインに回す割合を増やす計画。追加生産分の初出荷は2030年を見込む

2026年11月9日（月）



英国の生産者チャペル・ダウンは、スパークリングワインの生産に収穫物をより多く振り向ける方針のもと、ケント州テンターデンのワイナリーに450万ポンドを投じ、瓶内二次発酵方式のスパークリングワインの生産能力を14.3%拡大する計画だ。

同社が11月4日に発表したところによると、投資資金は圧搾設備、タンク、その他のワイナリー用機械に充てられる。平均的な収穫量を前提とした場合、瓶内二次発酵方式のスパークリングワインの年間生産能力は210万本から240万本へと、30万本増加する。

今回の拡張の狙いは、総生産量を増やすことよりも、一定の収穫量からチャペル・ダウンが生産するワインの構成を変えることにある。同社によると、テンターデンで加工するブドウのうち、瓶内二次発酵方式のスパークリングワインに回す割合を増やす。同方式では瓶内で二次発酵を行い、販売前に長期間熟成させる。この計画により、同ワイナリーの生産に占める瓶内二次発酵方式のスパークリングワインの割合は、現在の79%から90%へ、11ポイント上昇する。

数値を読み解くうえでは、この違いが重要だ。14.3%の増加は、同じ平均的な収穫量を想定した場合のスパークリングワインの生産能力を指す。前年比の売上増を示すものではなく、現在の生産量に30万本が上乗せされるという意味でもない。現在は他のワインに使っている収穫物の一部を、瓶内二次発酵方式のスパークリングワインに振り向ける計画だ。

チャペル・ダウンによると、新設備は2027年の収穫に間に合うよう設置される見込みだ。瓶内二次発酵方式のスパークリングワインは出荷前に熟成が必要なため、追加生産分の初出荷は2030年以降になるという。設備投資から醸造を経て、追加生産分が収益を生み始めるまでには長い時間がかかる。

この投資は、スパークリングワインが主要カテゴリーとなっている英国ワイン市場で、チャペル・ダウンが地位の強化を目指すなかで行われる。ケント州に拠点を置く同社は、スティルワインとスパークリングワインの両方を生産しており、この分野で知名度の高い生産者の一つだ。チャペル・ダウン・グループplcは2026年上半期に、純売上高940万ポンドを報告した。

ワイナリーへの投資資金は、より広範な資金調達と結び付いている。チャペル・ダウンによると、資金調達には総額約550万ポンドの株式売り出しが含まれ、その結果も11月4日に発表された。同社は、資金調達とテンターデンへの投資を、高付加価値のスパークリングワインの将来的な生産と販売を支える一体的な取り組みとして説明した。

チャペル・ダウンにとって、この計画の中心は、より多くのブドウを単純に加工することではなく、既存の収穫物の使い方を変えることだ。瓶内二次発酵方式のスパークリングワインに充てる生産割合を高めることで、英国の高級ワインを最も象徴するカテゴリーに、製品構成のより大きな部分を置くことを目指す。一方、売上に生産能力の拡大が反映されるまでには数年かかるため、投資家は待つ必要がある。

この計画はまた、多くのスティルワインとは事情が異なる、スパークリングワイン事業の基本的な特徴を浮き彫りにしている。ブドウ畑の管理、収穫、ワイナリー設備、生産にかかる費用は、完成したボトルが店舗やレストランに並ぶよりずっと前に発生する。チャペル・ダウンの場合、設備は2027年の収穫分から稼働する見込みだが、スパークリングワインの生産能力増強による商業的な効果が表れるのは2030年になると見込まれている。

同社の発表は、今回の計画を足元の需要が急増したことへの対応とは位置付けていない。むしろ、テンターデンのワイナリーで生産能力と製品構成を見直し、同じ収穫量から瓶内二次発酵方式のスパークリングワインを時間をかけてより多く生産できるようにする投資だと説明している。